

# 女子大学の役割は今後ますます増大します

相模女子大学 学長  
谷崎 昭男



たにざき・あきお氏

1944年生まれ  
1966年 早稲田大学第一文学部史学科国史専修卒業  
1970年 東京教育大学大学院文学研究科日本史学専攻  
修士課程修了  
1974年 相模女子大学短期大学部講師  
1993年 相模女子大学教授  
2003年～2005年 相模女子大学・相模女子大学短期大学部  
副学長  
2008年10月～現在 相模女子大学・相模女子大学短期大学部  
学長  
神奈川県私立大学連絡協議会監事, 日本私立短期大学協会常任理事,  
関東私立短期大学協会副会長, 神奈川県私立短期大学協会副  
会長などを務める他, 宗教法人義仲寺責任役員, 財団法人落柿舎保  
存会理事。

1900年(明治33年), 東京の本郷に開校された私立日本女学校が本学の始まりで, その後1909年に設立の, 女子の高等教育機関としてわが国で4番目に専門学校令の適用を受けた帝国女子専門学校が本学の直接の前身です。帝国女子専門学校はリベラルな校風を持ち, 国外から多くの留学生を受け入れるなどして繁栄しましたが, 不幸にも1945年の戦火ですべてを失いました。数々の苦難を乗り越えてようやく1949年, 現在地の相模原の旧陸軍通信学校の兵舎を利用し, 相模女子大学として再出発を果たします。今年で日本女学校が生まれて110年, 新制の女子大学となって61年というのが本学の歴史です。110年のうち, その半分以上は神奈川の相模原という地域とともにあることとなります。

「市民大学」の名称で1965年に第1回を開催した公開講座は, 当時はまだ全国に例がありませんでした。これにより地域の皆さまから親しまれる大学となることができたのですが, 大学開放あるいは生涯学習時代の今日を先取りするところみであったことは, 本学の誇っていい事績のひとつと自負しております。

相模原の大学キャンパスは, まださがみ野のおもかげを残しております。黒松, いちょう, ヒマラヤ杉などが生い茂り, 野鳥も多く見られ, 豊かな自然にあふれています。私はかねがね, 大学のキャンパスとはこうあるべきではないかと思っています。「キャンパスライフ」というからには, 大学はそれなりの整った環境を用意しなければなりません。無論それは快適で楽しい大学生活を送ってもらうためですが, さらに言えば大学教育の根幹に関わるものともいえます。

近年, 教養教育の重要性が叫ばれていますが, それが何かということについては必ずしも明確になっていません。教養とは何か。CULTUREという単語で考えれば, それは同時に「文化」を意味します。では, 文化とは何か。モノではなく, われわれを生かしている一箇の全体, すなわち「暮らし」。つまり「文化」

が一人ひとりの個人の上に現れたものが「教養」であるという理です。そう考えるならば, 教養とは, 人生そのもの, 生きることそのものと一体となった「知恵」といえるでしょう。別の言い方をすれば, 「いかに生きるべきか」と各自につねにそう問わしめるもの, それが教養といってもいいかもしれません。大学生活には勉強があり, 部活もあり, アルバイトもある。生活に様々なものが介入し, ともしれば流されてしまいがちになる。しかし「いかに生きるべきか」と自分に問いかけ, 暮らしを正そうとする努力がそのひとの教養を形づくるのだと思いますし, それを支援するのが大学に課せられた最大の使命です。

## 見つめる人になる。見つける人になる。

今年本学は創立110周年を期して, 新たなロゴマークとスローガンを決めました。

「見つめる人になる。見つける人になる。」

今後はこのスローガンのもとに, 教職員と学生とが一体となって, 新しい本学を見出していくことになるでしょう。当然ながら女子大学としては, 「女性として」何を見つめ, 何を見つけていくかが課題となります。

この間, 女子大学から男女共学に移行する大学が少なくありませんでした。本学に関して言えば, そのような考えはまったくありません。女子大学の役割は今後ますます増大していくだろうというのが私の見方です。男女の特性を考えると, 男性が「戦い」や「所有」を選ぶような時にも, 女性は戦わずに「分け合う」道を選ぶ割合の方が多い。そんな発想を伸ばすのが女子大学といえます。女性ならではのそうした柔軟な発想やセンスが, ともしれば男女共学では摘まれてしまうのではないかという危惧すら私は抱いています。女性の強い米国で, 近年女子大学が盛り返していることにも十分な理由があるのだろうと思います。

本学人間社会学部社会マネジメント学科の「社会マネジメントを担える女性の育成」という取り組みが教

育GPに採択され, 様々な成果が挙がっています。学内の成果発表会を見ると, 学生の生き生きとした発表にまことに感動します。男性の力に頼らず, 女性のみで一所懸命に取り組んだからこそ成長したのだと私は見えています。おそらく彼女らはそれに気づいていないでしょう。すべてを女性だけで行うことにどれほどすばらしい意味があるのか, それを本学の学生だけでなく社会全体にも問い, 女子大学の存在意義をもっと広く知らしめていきたいですね。

## 教員の資質向上以外に有効な改革などない

本学はどちらかといえば, 「改革」といった大きな変化を好まない大学として久しく終始してきました。それまでずっと学芸学部のみの一学部体制でしたが, 2年前に人間社会学部と栄養科学部を新設いたしました。これが最大の改革です。広げすぎたのではと当初心配しましたが, ありがたいことに学生の受け入れも上向き, この改革は成功を収めつつあると思っています。

しかし今後についていえば, 2年前のような大がかりな改革の予定はありません。規模を拡大する計画はありません。収容定員は約4000人。「教員と学生との距離が近い」というのが本学に対する学生の変わらぬ評価ですが, 規模を大きくしてしまうと, 本学のこうしたよい部分が失われてしまうのではないかと思います。

学校をよくしていくことについて, 妙案はないと私は考えています。結局のところ, 地道に教員の資質を向上させていく以外に道はないのではないのでしょうか。FDの実行も容易いことではありませんが, やつと今年度から, 授業公開によってお互いの課題を確認し合うような体制ができようとしています。先生方のそういう頑張りに期待しつつ, リーダーたる私自身も自分を磨き続けなければ, 誰もついてきてはくれないだろうと自らを励ましております。 ■